

学生海外調査研究	
米国における朝鮮戦争の記憶	
臺丸谷 美幸	ジェンダー学際研究専攻
期間	2008年11月0日～11月30日
場所	アメリカ イリノイ州 カリフォルニア州
施設	イリノイ州スプリングフィールド朝鮮戦争国立博物館予定地、シャニユーテ米国空軍基地内等関係施設、カリフォルニア大学ロサンゼルス校内映画とテレビ資料館

序

近年の米国において、朝鮮戦争の既存のイメージから新たな朝鮮戦争像を再構築する動きがみられる。今回の調査対象の一つである朝鮮戦争ナショナルミュージアム建設構想は、その象徴といえる位置にある。平成20年11月9日から11月30日の日程で、米国カリフォルニア州及びイリノイ州で行った本調査は、米国における朝鮮戦争像を冷戦期ハリウッド映画や現在建設予定中のミュージアムの調査を行い、冷戦期からポスト冷戦の現在に至るまでの朝鮮戦争の文化的イメージとそのイメージ形成の過程を省察し、現代東アジアの冷戦構造と相対させることで、米国における朝鮮戦争像を浮き彫りにし、その解釈から現代の記憶化の動きについて考察することを課題とした。そして、本調査は1950年代冷戦下から現在に至るまでの朝鮮戦争の文化的イメージの形成について考察すると同時に、現在の再記憶化の動きに焦点を当てることで、個人的な記憶から集合的記憶が形成される過程、そして集合的記憶が国家によって「認められ」、国家的記憶となる過程を分析し、個人的記憶と集合的記憶との接合点とその過程を見ることを最終目標とする。

本調査の対象と方法は、以下の3点である。(1) 1950年代冷戦下の朝鮮戦争の文化的イメージの考察のためのハリウッド映画の映像分析。(2) 現在の再記憶化の動向を把握するためのイリノイ州の朝鮮戦争ナショナルミュージアム建設の動向のインタビュー調査、および(3) カリフォルニア州に在住する日系人兵士による記憶化の動きについてのインタビュー調査である。また、調査地としてカリフォルニア州とイリノイ州を選定した理由は、1、映画資料を調査するにあたって、ハリウッドを抱えるカリフォルニア州ロサ

ンゼルスに位置するカリフォルニア大学ロサンゼルス校(以下UCLA)が豊富な映像資料を所蔵すること。2、朝鮮戦争映画に現れる日系人兵士像の分析を発端として着手した朝鮮戦争従軍兵士の調査はカリフォルニア州での動きが活発であること。3、朝鮮戦争ナショナルミュージアム建設の活動運動は、イリノイ州の朝鮮戦争退役軍人会を中心としたグループを中心として起こっていることがあげられる。

1. 誰が歴史を構築するのか 一 個人的記憶と集合的記憶、国家的記憶との関係性の考察

個々の調査事例の報告をする前に、個人的記憶と集合的記憶、そして国家的記憶との関係性について考えたい。本調査において、現在米国で記憶化の動きに中心的に携わっているのは決して、公権力を持った政府関係者や政治家ではない。この再記憶化の活動の中心的担う人々は多岐に渡り、退役軍人、退役軍人会関係者、退役軍人の家族サポーターとしてのNGO団体スタッフ、博物館関係者、聞き取り調査を行っている歴史学者やボランティアの人々などである。長年、米国において「忘れられた戦争」と認識されてきた朝鮮戦争は、明確な公的イメージ、文化的イメージを持たず、体験者の個人的記憶としてとどまっていることが多い。では、現在米国で行われているこの再記憶化の動きというのは既存の米国における朝鮮戦争像にいかなる変化をもたらす可能性があるのだろうか。

例えば文¹は、1980年韓国光州市でおきた光州事件について、現代の韓国政府によって公式謝罪が行われ、この民衆化への抵抗運動が、政府による〈公式な記憶〉として組み入れられてしまうことにより、民衆の歴史から国家の歴史となることを危惧している。

「(略) しかし光州事件に対する記憶はこの抗争が国家の〈公式的な記憶〉となった瞬間、危機に立たされることになる。もし現在韓国内と外で一般的な定説として受容されている光州事件についての言説や叙述が、この抗争と関連した数多くの記憶を排除したり省略したりするのであれば果たしてどのような結果が起こるのだろうか？」この文の解釈に沿って考えると、米国における朝鮮戦争の再記憶化の動きとは、まさにこの個人の記憶が集合的記憶に組み込まれ、最終的に国家が選び取る「正史」ともいえるべき「公式な歴史」に組み込まれてしまう可能性を持つ。さらに、先に例として挙げた光州事件の場合、市民 対 政府 (国家) という構図が成り立つが、米国における朝鮮戦争にまつわる記憶の保有者は、その多くが実際に朝鮮半島に従軍した元兵士である (すなわち米国に忠誠を誓い、仕える身であった者) である限り、国家による顕彰行為への欲求と分かちがたく結びついており、複雑な様相を帯びている。誰が何のために何を記憶し、いかなるものが取捨選択された結果として公式な記憶となるのかは、朝鮮戦争の記憶化を巡る動きを考える上でも重要である。以上のことを視野にいれながら、各調査について地域ごとに報告する。

2. カリフォルニア州の映像資料分析ならびに日系人退役軍人の記憶

カリフォルニア州の調査方法は2つに大別される。1つ目はUCLA映画とテレビのアーカイブスでの映画視聴と関係資料の調査であり、2つ目は日系人退役軍人へのインタビュー調査である。

2-1. 映画資料視聴と収集

対象は、主に日本で視聴困難な1950年代の作品のハリウッド映画を選定し、大衆娯楽映画における冷戦当時の朝鮮戦争像について調べた。具体的には、『Battle Circus』² 『Battle Hymn』³ 『One Minute to Zero』⁴ などを視聴し、特に『Battle Hymn』は、米国の戦争の大義となる米国が救うべき「被害国の子供と女たち」が重要な脇役として描かれており、1950年代の映画に描かれた彼ら/彼女らのイメージ像は、3. で言及する2008年現在のイリノイ州の朝鮮戦争ナショナルミュージアム展示構想においても繰り返し主張される「兵士と子供の物語」に共通するものであり、それらのイメージの原型が、1950年代すでにあらわれていたことを確認した。映画では、朝鮮戦争時の戦争孤児や、スパイである中年の女/米国の協力者である若く美しい女 (戦争被害者としての女) が、敵/味方、として二項対立的に明確に区分されて朝鮮半島の子供と

女性の姿が描かれており、『Battle Hymn』は、これまでの調査者の研究を補完するために、今後も、詳細な映像分析が必要であることを再認識した。

2-2. 日系人兵士、NGOスタッフ関係者へのインタビュー

今回の調査では、のべ3名の朝鮮戦争日系人退役軍人と、日系人退役軍人会とつながりの深いNGO団体のスタッフ2名にインタビュー調査を行った。インタビュー方法はカリフォルニア、イリノイ州の両者において、聞き手 (報告者) と語り手の一対一を原則としたが、うち、カリフォルニアで行った一組はNGOスタッフの娘を中心として、退役軍人の父も語り手として加わり、母も聞き手として同席する形で行われた。インタビュー方法は、聞き手の質問に語り手に自由に語ってもらう方法を取り、インタビュー時間は1時間から長いものでは3時間以上に及んだ。質問内容は元兵士には朝鮮戦争時の従軍経験から、昨今の記憶化に対する個人的な思いについてまで、また、現在の文化的産物の構築について記念碑の建設や記念式典の開催など、顕彰行為への関与についても語ってもらった。NGOスタッフには現在の退役軍人会との関係性を中心に、当事者が持っているアジアのイメージや思いに始まり、日系アメリカ人としてのアイデンティティとNGO活動の関係性、記憶の継承者として先代から3次世代へ語り伝える役目への思いについて語ってもらった。これらのインタビューで明らかになったことは、退役軍人にとって、現在の顕彰行為への関与は、自己の経験を誰に「語り」、誰がその「語り」を受け止めているかの実態に大きく関係しているということである。そして、退役軍人の記憶化の活動を支援しているNGOスタッフの語りからは、受け止め手としての役割を果たし、朝鮮戦争以降の日系人兵士の経験を日系アメリカ人の歴史として組み入れる活動を通して、自己のエスニックアイデンティティにも影響を与えていることが考察された。

小林⁵は第二次世界大戦下の日系人強制収容所の跡地を巡礼に訪れる二世と「戦後生まれの三世・四世たちの『聖地巡礼』」に関する考察において、三世・四世たちの語りは「家族の中で語られなかったストーリーを拠点として集合的記憶が表象される場の構築へ向かっていく様子を浮かび上がらせた」と分析しており、修養を経験した世代 (当事者) から次世代、次々世代へ記憶を継承し、共有する記憶の場の構築について考察しているが、本調査における朝鮮戦争の退役軍人 (当事者) にとっての戦争体験の記憶化の問題には、家族 (近親者) とのその後の関係が大きく関係し

ている。そして、家族に継承されない記憶や体験が公的記憶の形成への欲求とつながっている。さらに、退役軍人らが後年の歴史家のインタビューに協力する際や文化的産物の構築に関与する際、彼ら/彼女らの語りは、戦場の経験のみならず、当時や帰還後の家族関係に多く言及する傾向がみられ、戦場と家庭二つの次元の「語り」を用いて、彼ら自身の戦争のストーリーが構築されている。以上のように彼らの語りは、個人的な家族との関係に左右される部分が大きく、公的な顕彰行為は近親的愛情の代償として行われる可能性もあり、個人的記憶から集合的記憶への記憶化の過程には個人の従軍経験と同様、彼らの家族関係が大きく関わっている傾向が見られた。

また、調査対象としたこのNGOは、広く一般社会に、米国の歴史としての日系アメリカ人の役割を語り伝えることを目的とし、日系アメリカ人の体験をオーラルヒストリーで記録、収集している団体である。団体の構成員は20代から40代の若手の日系アメリカ人または日本人であり、カリフォルニアに本部を持ち活動している。日本にも支部を持ち、近年精力的に活動している。日系人の先人達の歴史を残すということが最終目的である彼らの調査対象は多岐にわたり、朝鮮戦争退役軍人へのインタビューはその中の一例である。アーカイブシステムをカリフォルニア州内の某大学の歴史学オーラルヒストリー学科に持っていることから、彼ら/彼女らがこの問題をオーラルヒストリアンの立場から取り組んでいることが明確であろう。このように退役軍人のみならず、退役軍人を支援し、彼ら/彼女らの記憶の語りを継承する次世代の人々の動きの分析は、現在の再記憶化の動きを把握する上では重要である。それは、次世代の人々の支援によって、当事者の退役軍人が自己の体験や記憶を公的な記憶として発表することも可能だからである。今回のインタビューは今後分析を深め、改めて論文として発表する予定である。

3. イリノイ州朝鮮戦争ナショナルミュージアムを巡る動き

調査者の元々の研究関心は、米国における朝鮮戦争のコメモレーション（顕彰物）を構築する際、それに関与する人々の心的過程とイメージの変遷、コメモレーションの結果として、表象される戦争像についてである。2008年現在の朝鮮戦争の「記憶化」を巡るポリティックスを分析するために、朝鮮戦争ナショナルミュージアム建設動向を把握することは、「なぜ、今、朝鮮戦争ならびに冷戦期を再考するのか」といういわ

ば問題提起にあたり、調査者の博士論文においては、序章的位置づけにあたる。

朝鮮戦争ナショナルミュージアムは、イリノイ州の州都、スプリングフィールド市に建設が予定されている。スプリングフィールド市は人口約11万、第16代アブラハム・リンカーンが政治生活の大半を過ごした「リンカーン第二の故郷」として知られている。エスニシティ分布は白人が7割、黒人が2割、ネイティブアメリカンやその他アジア系が残り占めている。市の主な産業は観光であり、中心街の至るところにはリンカーンゆかりの建物が点在している。特に中心となるのが、リンカーン国立博物館と図書館で、朝鮮戦争ナショナルミュージアムはこの観光地の数ブロック先に建設が予定されている。ミュージアム建設の背景には、イリノイ州の退役軍人を中心とした活動があり、このミュージアム建設の動機としては、イリノイ州は全米でテキサス州に次いで、朝鮮戦争へ従軍者数が高いことも影響しているだろう。イリノイ州における朝鮮戦争の記憶化の動きは、すでに10年以上前から始まっており、1996年にはリンカーン墓地がある市郊外のオークリッジ共同墓地にイリノイ州朝鮮戦争記念碑が設立され、2004年には朝鮮戦争休戦50周年の退役軍人のパレードも開催されている。

聞き取り調査からは、朝鮮戦争ナショナルミュージアムは「ナショナル」と銘打っているが、国・州・群・市などの公的な経済的支援は受けておらず、主に退役軍人など設立の賛同者からの寄付金によって運営されており、この「ナショナル」は「全米」という意味合いが強いことが分かった。しかし、スプリングフィールドが国民的英雄であるリンカーンにゆかり土地であり、このミュージアムがスプリングフィールドを最終的な土地として選んだのは意識下/無意識下の両方で意味があるだろう。土地空間とイメージ形成の関係についてはあらためて論じたいと思う。本報告書で以下、人々の心象と戦争イメージの形成についての解釈の一例を提示するにとどめる。

酒井は、ベトナム戦争を題材とした『ディア・ハンター』⁶の映像分析において、この映画では「故郷」であるペンシルヴァニア州の田舎町とベトナムのシーンのみが描かれ、「一つの世界から別の世界に至るまでの旅程にあるはずの」風景が切り落とされることによって『故郷』の町とベトナムがまるで中に浮いているたった二つの世界として感じとられる⁷と表現している。この映像分析から直ちに連想されるのは、国家的な顕彰行為からは常に外され、今なお「帰還の地」を求めている朝鮮戦争退役軍人達にとって、

また彼らの記憶を継承する者達にとって、スプリングフィールドという土地はイリノイ州という自己の故郷のフレームに収まる（にふさわしい）風景なのである。酒井は、映画『ディア・ハンター』に描かれるベトナムは「それ（ベトナム）との対象によって「故郷」が構成されるような、対象項の役割を果たす「別」世界なのである。」⁸と述べるが、イリノイ州の風景においても「アジア」は彼らの「故郷」を特定するための他者であり、さらにイリノイ州における朝鮮戦争の記憶が先の映画のそれより複雑であるのは、そこに「故郷」と「戦場」以外の、朝鮮戦争時の「日本」の記憶が断片的に、いわばサブリミナルのように入り込んでいる点である。

現在、朝鮮戦争ナショナルミュージアムに収められる予定の資料や展示物は現在、ラントール、シャニューテ空軍博物館（スプリングフィールドから車で約2時間、150キロほど東に位置する）に保管、一部が展示されているが⁹、兵士が故郷のイリノイへ持ち帰ったものは戦地である朝鮮半島で使った軍事品、助けた孤児と孤児院の写真、朝鮮戦争勃発前後に兵士が購入したと推測される韓国製の土産物、駐屯地や休息地として立ち寄った50年代の日本の土産物、東京の地図などが混在していて、それらは退役軍人の記憶のピースであり彼らの体験の断片を物語るのである。すなわち、この朝鮮半島と日本の物品の混在している展示にこそ彼らの抱く朝鮮戦争の記憶と戦争自体の複雑性が象徴されている。

翻って考えると、記憶化の結果として表象された、イリノイ州朝鮮戦争記念碑では公的な記憶としての「記憶の選別」が行われており、上記のミュージアム展示品に見られるような、未完成である故に露出される種々の記憶の混在は消え去ってしまう。たとえば、イリノイ州記念碑には、O.P. スミス将軍の「地獄への退却（Retreat Hell）、我々は違う方向へ攻撃する。」という言葉が刻まれている。また、ワシントンD.C.のナショナルモールに立つ朝鮮戦争国立記念碑は一体が2メートル近い大きなブロンズ兵士像で構成されている群像であるが、兵士のレインコートと険しい表情からは、冬の戦いを象徴している。すなわちこれらの公的な朝鮮戦争のイメージ化は意図的に記憶が選択されており、表象されるのは1950年9月15日に始まった「戦史に残る輝かしい功績を収めた」¹⁰仁川上陸作戦と中共軍の全面参戦後、38度線までの撤退を余儀なくされた同年11月末の戦い、“Choshin Reservoir”（長津湖の戦い）に集約される。このスミス将軍の言葉と同名の映画『Retreat Hell!』（1954）¹¹においても、その記憶

の選別は端緒であり、また冷戦下であるからこそ、描かれ方は明確である。この映画の登場人物の海兵隊はすべて白人で構成され、他者としての朝鮮半島の人々はおろか、米国軍事史において、朝鮮戦争は初めて人種統合の部隊が編成された戦争であったという事実も描かれない。そして、戦うのは象徴的な仁川と長津での戦いなのである。（その間の10月の平壤陥落も、米軍後退の様子も描かれない。）これら「記憶の選別」と文化表象の関係については、今後の研究で明らかにしていきたい。

今後の研究の方向と課題

本調査はカリフォルニア州とイリノイ州を対象地域とし、朝鮮戦争の記憶化をめぐるポリティックスについて、冷戦初期の文化的イメージ分析に始まり、現在における再記憶化の運動について考察するという試みを行った。そして、両州の調査の結果、朝鮮戦争従軍経験者など記憶化の活動に携わる人々の「語り」は、現代の東アジア情勢が背景として構築されているという共通性を持っていることが明らかになった。例えば、朝鮮戦争ミュージアムのパンフレットには寄付を呼びかけるキャッチコピーとして、「韓国は今や世界第10位の経済力を保持している—（東アジアにおける）民主主義の“要塞”（bastion）として：無駄ではなかったのだ」という言葉が書かれている。この言葉には、現在の朝鮮半島情勢、米韓、米朝関係が背後にある。朝鮮戦争のイメージ形成には、その同時代におけるアメリカが向ける東アジアへのまなざしが意識下、無意識下両面で左右される。

加えて、本研究を日本文化研究の文脈において考えると、米国における朝鮮戦争の記憶化には日本が深く関係しており、イリノイ州の朝鮮戦争ミュージアム関係者から聞いた言葉を借りれば、「日本（の存在）抜きに、朝鮮戦争は語れない」のである。日本の地理的条件も相俟って、米国の朝鮮戦争の介入には日本の存在が軍事作戦上必要不可欠であった。故に1950年代のハリウッド映画において、朝鮮半島の惨劇は描かれず、同盟国日本の魅力を強調し、民衆化した東アジアの象徴として描いたことは、必然的だったのである。

以上の調査結果を踏まえて、今後私が注目したいのは朝鮮戦争に従軍した日系人兵士の語りの分析である。日系人兵士の問題とは朝鮮戦争の顕彰行為と再記憶化の問題にいかなる視座を投げかけるのか。例えば映画『二世部隊』（1951）¹²は、第二次世界大戦時「もっとも多く勲章を受けた部隊」¹³として知られる442連帯戦闘部隊の日系人兵士の活躍を描いたことで知られ

ているが、この作品を朝鮮戦争のイメージ形成という文脈におく時、朝鮮戦争勃発後の1951年に作成・公開されたということは、何を意味するのだろうか。先に紹介した『Retreat Hell!』が翌年の1952年に作成され、その他の冷戦下のハリウッド映画も同様に白人の作り手による白人の物語が継続していることを鑑みても、為政者側の欲望、国家的表象の欲望の中に日系人兵士像も巧みに組み入れられたと解釈できるだろう。今後は、これまでの映画分析の蓄積を出発点として、日系人兵士に視座を置き、表象研究とオーラルヒストリーの交差する場から、朝鮮戦争の文化的イメージが形成される過程での個人的な願い、共感者への伝承の可能性、家族との結びつきとの関係性と、その結果としての文化的表象の生成過程を論じたい。

さらに、本研究は、第二次世界大戦以後の日系人兵士研究として、日系人史にも新しい視点を投入することができるだろう。第二次世界大戦中に従軍した二世部隊は日系人史において日系人の戦時中の忠誠心の象徴としての強力なディスコースを保持してきた。では、これまで語り得なかった朝鮮戦争における日系人兵士像について考察することは、第二次世界大戦中の日系人部隊の功績が、日系人の市民権寄与に大きく貢献したという父権的ディスコースにいかなる変化をもたらすのであろうか。ここでは、これらを散在する問題群として提示するに留め、本報告を終了する。

注

- 1 文富弼、板垣竜太訳、「「光州」20年後－歴史の記憶と人間の記憶（I）」、『現代思想』、2001年。vol29.-9、93頁。
- 2 『Battle Circus』、リチャード・ブルックス監督、MGM、1953年。
- 3 『Battle Hymn』、ダグラス・シーク監督、ユニヴァーサル・インターナショナル・ピクチャーズ、1957年。
- 4 『One Minute to Zero』、テイ・ガーネット監督、RKOピクチャーズ、1952年。
- 5 小林多寿子、「個人的記憶と家族のストーリー―日系人研究への視点」、『ソシオロジ』、社会学研究会、2006年、179-181頁。
- 6 『ディア・ハンター』、ミシェル・チミノ監督、ユニヴァーサル・ピクチャーズ、1978年。
- 7 酒井直樹、『日本/映像/米国―共感の共同体と帝國的国民主義』、青土社、2007、78-79頁。
- 8 同上、78頁。
- 9 2008年11月調査
- 10 小此木政夫、『朝鮮戦争―米国介入過程』、中央公論社、1986年、153頁。
- 11 『Retreat Hell!』、ジョセフ H. ルイス監督、リパブリック・ピクチャーズ、1954年。
- 12 『二世部隊』、ロバート・ピローシ監督、1951年。
- 13 島田法子、『戦争と移民の社会史―ハワイ日系アメリカ人の太平洋戦争』、現代史料出版、2004年、79頁。

だいまるや みゆき／お茶の水女子大学大学院 人間文化創成科学研究科 ジェンダー学際研究専攻

【指導教員のコメント】

臺丸谷美幸さんの研究は、米国における朝鮮戦争の記憶の構築を明らかにすることを目的としている。これまでの研究では、主に、ハリウッド映画に描かれた朝鮮戦争におけるアジア人表象をジェンダーとエスニシティの視点から分析することを行ってきた。

本調査研究では、これまでの研究方法であった映画表象の分析に加え、近年米国において生じている朝鮮戦争の再記憶化の動向に注目し、イリノイ州での朝鮮戦争ナショナルミュージアム建設構想について、退役軍人ヘインタビュー調査をするとともに、カリフォルニア州に在住する日系の朝鮮戦争従軍兵士へのインタビュー調査を行った。

その結果、1950年代の冷戦下から現在に至るまでの朝鮮戦争の文化的イメージの形成について考察すると同時に、現在の朝鮮戦争再記憶化の動きに焦点を当てることで、個人的な記憶から集合的記憶が形成される過程、そして集合的記憶が国家によって認められ、国家的記憶となる過程を分析し、個人的記憶と集合的記憶との接合点とその過程を明らかにすることの研究上の価値を明確にしたといえる。

今後は、このような研究方法により、米国における朝鮮戦争の記憶化について、その「多層的」な構築過程が解明されていくことであろう。その解明が、説得力のあるかたちで論じられることにより、博士論文としてのスケールを持った、意義のある研究として結実するものと思われる。

(お茶の水女子大学大学院 人間文化創成科学研究科 教授 舘 かおる)